

児童養護施設の参画的会議における暴力問題の扱い方についての検討 —職員と子どものやりとりを中心に—

立命館大学大学院応用人間科学研究科
臨床心理学領域 人間形成・臨床教育クラスター
高 祥也

本研究では、児童養護施設つばさ園で行われている全体会という実践を取り上げ、そこではどのようなやりとりが行われているかを明らかにし、暴力問題についての話し合いを全体で行うことの意義について検討することを目的とした。全体会の発言内容を記録した議事録を読み、職員と子どもとの間で行われるやりとりのパターンを分析し、「加害児が自身の加害性を認めているパターン」、「加害児が自身の加害性を認めていないパターン」、「参加児が全体会の開催に疑問を呈するパターン」の3つに大きく分類し、そこで行われるやりとりの内容について考察を行った。その結果、全体会の中で行われているやりとりでは、「アクティブ・リスニング」、「わたしメッセージ」、「感情と行動を分けて取り扱う」など、ある意味オーソドックスと言える対人援助スキルが、子どもの主体性を尊重するという一貫した姿勢・考え方のもとに用いられていること、加害児支援の側面が強いということ、職員の対人援助スキルを参加している子どもたちが間接的に学習している可能性があるということが示唆された。

また、本研究によって以下の3つの研究課題が見出された。一つ目は、議事録に記載されている言葉の行間や非言語メッセージを含めた検討、二つ目は、全体会の開催前後の職員の関わりの検討、そして三つ目は、こうした全体会という体験を積み重ねることが、子どもの日常生活にどのような影響を与えるのかということである。